「地域でのボランティア」②

＿＿＿年 ＿＿＿組 ＿＿＿番

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

●同年代の中学生は，ボランティア活動を通してどんなことを考えたのだろう

2006年に行われた「第56回全国小・中学校作文コンクール（中学校の部）」で文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞したのは，中学３年生の男子生徒が自発的なボランティア経験から感じたこと・学んだことを綴った作品でした。その内容を，簡単に紹介します。

「人として人を“尊厳”すること―惜別を超えた瞬間（とき）―」
（横浜国立大学附属横浜中学校３年　夏苅（なつかり）拓磨）の紹介

2005年の夏休み，介護の仕事をしているお母さんの依頼で，夏苅君は一人暮らしのお年寄りのゴミの分別収集を手伝うことになりました。彼はしぶしぶ始めるのですが，足が不自由ながら勝気で明るいおじいさんと，坂の上に住む上品なおばあさんに出会います。おじいさんとおばあさんのことが気になって，結局彼は夏休み中，毎日のようにゴミの分別を手伝い，安否を確認することになります。

激しい台風の日，古い家に住むおばあさんのことが心配になり，彼はお母さんと一緒におばあさんの安否を確認に行きます。おばあさん自慢の庭の桜の大木が家を守り，おばあさんは無事でした。「古いけれどこの家で往生したい。来年はお花見をしよう」とおばあさんは言います。そうは言っても，「本当は一人暮らしより施設に入ったほうがいいのではないか」と彼はお母さんに問いかけますが，お母さんは無言のままでした。

新年になり，あのおじいさんが転倒して大ケガをしたことで弱気になり，施設に入ることになったことを知ります。「あの勝気なおじいさんが，施設に入ることを了承するなんて」と彼は驚くのですが，一人暮らしよりは安心だろうと思います。

そして春が来る前に，おばあさんが急な発作で亡くなってしまいます。ショックを受けた彼は「おばあさんは施設に入ったほうが幸せだったのではないか」とお母さんに問いかけます。しかし，「大切なのはどう生きたいのかということ。おばあさんは，長年暮らしたあの家に住むことを望んでいたし，あの家で最期を迎えられて幸せだったと思う」と諭され，２人でおばあさんを偲びます。

翌春，おばあさんの家の近くを通りがかった彼は，おばあさんの家に行ってみます。そこに咲いているみごとな桜を見て，彼は本当の意味でおばあさんとのお別れを果たし，人間としての「尊厳」を彼なりに受け止めたのでした。

夏苅君は，ボランティア活動をすることで，違う世代の人の生き方や，その人らしい生き方の大切さ，人にとって何が幸せなのかなどを学ぶことができたようです。この作品は，日本漢字能力検定協会（監修）読売新聞社（編）（2007）．第56回全国小・中学校作文コンクール　作文優秀作品集――中学校　オーク，に掲載されています。興味をもった人は，全文を読んでみてください。

©2011 Koizumi & Yamada